

ハインリヒ・ベル「文学の理性をめぐる試み」
ノーベル賞記念講演，ストックホルム，1973年5月2日

木本 伸（訳）

解題

ここに訳出したのは次のテキストである。Heinrich Böll: Versuch über die Vernunft der Poesie. Nobelvorlesung, gehalten am 2. Mai 1973 in Stockholm. In: Georg Langenhorst(hrsg.): 30 Jahre Nobelpreis Heinrich Böll. Zur literarisch-theologischen Wirkkraft Heinrich Bölls. Münster (LIT) 2002. S.17-30.なお原文には章立てはないが、読みやすさを考慮して訳者の判断で見出しを入れている。

本稿はベルのノーベル文学賞受賞記念講演の全訳である。ここでベルは現代社会における文学の意義について語っている。彼が示すのは社会の片隅でひっそりとした生存を許されるような文学観ではなく、西洋文明の批判原理としての文学という大胆な立場である。このような批判原理としての文学のあり方を彼は「文学の理性」(die Vernunft der Poesie)と呼ぶ。原語の Poesie は文学形式のひとつとしての詩を意味することが多い。しかし、ここでの主題は狭義の詩ではない。本稿の多数の個所で文学と芸術が一括りに語られていることからわかるように、ここで Poesie という言葉に込められているのは、文学や芸術をあらゆる詩的精神と呼ぶべきものだろう。そのため本稿では、広く文学の営みを特徴づけるものとして「文学の理性」という訳語を採用した。

この「文学の理性」が立ち向かうのは、西洋文明の根本原理と呼ぶべき合理的理性である。「全面化した理性の最終産物たる都市」などの表現からも読み取れるように、ベルはこの時代の合理主義批判を共有していた。それは有用性の観点から世界を秩序付ける「道具的理性」の批判者だったアドルノとも通じ合う立場だろう。アドルノが同時代の作家としてベルを高く評価していたことは偶然ではない。

本講演でのベルの言葉によれば、いわゆる大文字の理性はアメリカ・インディアン「水や風の文学」を否定して、彼らの大地を利潤に屈服させた。このような経済的合理性は利潤を追求する過程で、必然的に「ごみ」(Abfall)をもたらす。そこには利益につながらない「人間性」(Humanität)もふくまれていく。近代都市が人間疎外の場でもある由縁である。この近代の「ごみ捨て場」から人間性を拾い上げていくのが、彼の言う「文学の理性」に他ならない。実際にベルの作品では、町の片隅でひっそりと生きるような「小さな人々」

が描かれていく。そこでは、いわばごみのように生きざるをえない人々の存在の輝きが活写されるのである。

ところで、ドイツ語でごみを意味する *Abfall* の原意は「地に落ちること」である。ここで地に落ちたものに輝きを見出す作家の視線には、「貧しい人々は幸いである、神の国はあなたがたのものである」(ルカ伝)というイエスの思想がこだましていることを指摘しておきたい。けだし、ベルはカトリックの作家だったのである。

以上のように、ベルには文学は人間性が確保される最後の場所だという強い使命感があった。ところが、このような点は看過されやすく、これまで彼の作品はドイツ社会に対する直接的批判として受け取られる傾向が強かった。多くの人々にとってベルは何よりも国民的良心の代弁者だったのである。しかし、そのような見方だけでは、彼の文学は過ぎ去る時代とともに消えていくことになるだろう。いわば戦後ドイツという枠を超えた「近代の作家ベル」の可能性が問われているのだ。その際、「文学の理性」という概念の検討が重要なものとなることは疑いない。本稿はこのような検討課題への一助となるばかりではなく、ベルの時代よりも、いっそう有用性の関心で貫かれつつある現在の社会状況において、文学の存在意義を考える上でも重要な示唆を与えるものであると思う。

本文

テーマの説明

親愛なるギイロフ様、尊敬するスウェーデン・アカデミー会員の皆様方、まず私にとって二度目となる、このような心温まる御歓待に心からの感謝を申し上げます。お集まりの皆様、まずは私が講演のテーマを変更した理由について説明することをお許してください。私はロシア文学のドイツ文学との関係について、ロシアおよびソビエトとドイツ、つまり東西ドイツとの政治的歴史的關係についてお話しするつもりでした。ところが今回の講演の準備を始めたときに、たいいていの作家が時に応じてやることですが、私は校正を読むことになりました。私はそこに自分が過去数年に書いたものを見出し、もうすべて書いてしまったことばかりだということに気づいたのです。

私は 1966 年から 1968 年まで、ある記録映画の準備として集中的にドストエフスキーに取り組み、この作家に関する映画の台本、本文、注釈などを書きました。その後、彼の 150 回目の誕生日を機会とした包括的なラジオ討論に参加し、それから一、二年後の 1971 年に一時間半の講演を執筆し、それはトルストイの本の跋文として出版されることになりました。この講演は「接近の試み」という表題で、私がここでもう一度述べるはずだった事柄は、すべてそこに書かれているのです。皆様方と私自身も退屈を免れるために、私はテ

ーマを変更することにしました。皆様には、ご理解いただきたいと思います。なぜなら同じことを繰り返すことは、私にとって、とても無縁で退屈なことだからです。それに私はとても時宜に適ったものと思われる別のテーマに達着したのです。私は文学の理性という問題への接近を試みました。なぜなら会話や議論や出版物においても確認したところでは、ある種の文学的および芸術的問題の独断的主張において、すべてが「情報かそれとも芸術か」という定式へと単純化されているようなのです。そこで私はこの講演を「文学の理性をめぐる試み」と名付けることにしました。

計算不可能な「あまり」

事情に通じているはずの一方の人々によって主張され、同様に事情に通じているはずの他方の人々には否定されていることですが、橋の建築のように見た目には合理的で計算可能なもの、建築家やデザイナーやエンジニアや労働者が共同してもたらずのものにも、数ミリから1センチ程度の計算不可能なところが残るといいます。こうした道具で加工され形成されたものについて、ごくわずかな計算不可能なところが残るのは、相互に複雑に関連する化学的かつ技術的な細部と素材の塊について、そのありうるすべての反応と、さらには古典的な四大（地水火風）の作用を事前に正確無比に計算することの難しさに、その理由が求められるのかもしれませんが。つまり原案に、何度も計算され点検された技術的・化学的・統計的な構想だけに問題があるのではなく—私はこう呼びたいのですが—その具体化に、それは現実化とも言えますが、問題があるようなのです。この原案を拡大する際の予測不可能な、わずかな誤差に等しい計算不可能なあまりの部分、たとえそれが1ミリよりさらにわずかなものであるとしても、私たちはこれを何と呼べばよいのでしょうか。この隙間には何が隠されているのでしょうか。それはアイロニーと呼び習わされているのでしょうか、それは文学でしょうか、神でしょうか、レジスタンスでしょうか。あるいは、もっと流行の言い方をするならばフィクションでしょうか。こうした事情に通じていた人で、かつてパン屋であった画家が、あるとき私に語ってくれたのですが、夜が白みかける頃というか、ほとんど夜の時間になされるパン作りも極めて冒険的な行為だということです。添加物や温度や焼き時間の按配を多少なりとも直感的に探り出すには、白みかける夜に鼻先とお尻を突き出さねばなりません。なぜなら、どの、どんな一日も、それ独自のパンを要求するからであり、それは一日の労苦をわが身に引き受けるすべての人々にとって、朝の最初の食事の重要な秘蹟の要素なのです。このほとんど計算不可能な要素を、やはり同様にアイロニー、文学、神、レジスタンスあるいはフィクションなどと呼ぶべきなのでしょうか。この要素なしに、どうしてやっていけるのでしょうか。これを愛などと呼ぶのはやめておきましょう。愛の広大な大陸はすっかり探求されつくしたなどとは言えないにもかかわらず、どれほど多くの小説や詩や評論や信仰告白や痛みや喜びが、この愛という名の大陸に無造作に積み上げられてきたのか、だれにもわからないほどです。

創作という行為

なぜ、どうして、あれやこれやのものを書いたのかと問われると、私は決まっていつもひどい困惑に陥ります。私は質問者だけではなく自分自身にも、あますところのない回答を与えたいのですが、そんなことはできたためしがありません。創作という行為の全体的な関連を再構成することはできないのですが、できることなら少なくとも自分が書いた文学作品は、橋の建設やパンを焼くことよりもわかりやすい事象にしたいと思います。明らかに文学は、その表現のすべて、つまり内容と形式において解放的な力を持ちうるのですから、より多くの人々が参入するように表現の成立過程をお伝えできるならば、とても有益なことでしょう。しかし、私自身が明らかにしたいと思っているにも関わらず、およそそのところも説明できないのはなぜでしょうか。この最初の一行から最後の一行まで自分の手で紙に写し、幾重にも変化をつけ、書き換え、部分的にアクセントを置き換え、しかし時間が経つにつれて自分にも異質となるもの、どんどん過ぎ去り自分から遠ざかるもの、ところが他人にとっては、あるいは形式を与えられた内容として重要になるものとは何なのでしょう。理論的には事象を完全に再構成することは可能に違いありません。それは執筆作業と平行して作成される一種の記録であり、もしも包括的なものとなるならば、おそらくは作品の多様な全体性を備えたものとなるでしょう。それは知的かつ心的次元だけではなく、感覚的かつ物的な次元にも沿うものであらねばなりません。執筆時の食事、気分、代謝、感情をわかりやすく伝え、作品が書かれた環境のあり方を具体的に示すだけではなく、執筆の舞台背景としても描き出さねばなりません。たとえば、ときおり私は執筆中に何も考えることなくスポーツ番組を眺めることがあります。それは深く考えることなく瞑想に耽るためであり、白状しますが、これはかなり神秘的な訓練なのです。しかしながら、こうした番組のすべてでも省略されずに記録されねばならないでしょう。なぜなら、番組の中のキックやジャンプが私のぼんやりとした瞑想に何らかの力を与えたかもしれませぬし、手ぶりや微笑み、レポーターの言葉やコマーシャルについても同じことが言えます。すべての電話のやり取りや、そのときの天気や手紙の内容、どの一本のタバコも記録に持ち込まれねばなりません。走り去るクルマや電動ハンマーの音、全体の関連を乱しかねないニワトリの鳴き声などもそうです。

作家の机

私がこの原稿を書いている机は76,5cmの高さで、机板は69,5×111 cmです。旋盤で加工された脚と引出しが付いた70年から80年前の代物です。私の妻の大叔母が所有していたもので、この人は夫が精神病院で亡くなり自分は小さな住まいに引っ越した後、自分の兄、つまり私の妻の大叔父に、この机を売り渡しました。こうして、この何の価値もなく蔑まれ蔑むべき家具は、妻の大叔父の死後、わが家の所有するところとなったのです。そして何処とも知れず放り出されていたものが、ある引越しの際に見つけ出され、爆撃で損

なわれていたことがわかりました。第二次大戦中に爆弾の破片が机板を貫通していたのです。政治・社会的に言及すべき内容の出発点としてならば、この机を話の出だしに使うことにも、たんなる感傷以上の意味があるかもしれません。荷造りの作業員は徹底した軽蔑を示して、この机を運ぶことさえなかば拒否したのですが、その態度は、これが今も使用されているということよりも重要でしょう。私たち家族は一感傷や思い出のためではなく、みずからの主義のために一机がごみ捨て場行きとならないように頑張ったのですが、その机が今でも使われていることは、ほんの偶然にすぎません。しかし、それからいくらかのものをこの机で書いてきましたから、ほんの一時の愛着くらいは、お許しただけで良いでしょう。ほんの一時、というところを強調しておきたいと思います。机の上に何かあるかは、語らないでおきましょう。それらは瑣末で取り替えのきくもの、たまたまそこにあるものです。もしかしたら例外は、レミントンの商標入りのタイプライターでしょうか。トラベル・ライター・デラックス型で1957年の製造、この自分の生産手段にも私は愛着を覚えています。税務署の方とはつくりに関心を失くしたような代物です。もっとも税務署の収入にはずいぶん貢献しましたし、今でも貢献しているのですが。どんな専門家でも軽蔑の眼差しで眺めるか触るようなこの道具で、およそ四本の長編小説と数百のものを書いてきましたが、私が愛着しているのはそのためだけではなく、やはり主義によるのです。なぜなら、それはまだ使えるものですし、どれほど作家の投資機会や投資欲がわずかであるかを証明しているのですから。私は机とタイプライターのことを話しましたが、それは、この必要不可欠な二つの小道具さえも、完全に説明することはできないことを明確に認識するためです。もしも私が二つの道具の物質的・工業的・社会的過程と由来を、それが必要とする厳密な正確さで調査しようとするならば、イギリスと西ドイツの産業史と社会史の無限に近いハンドブックが生まれることでしょう。この机が置かれている家や部屋について語ることは、やめておきましょう。家が建つ土地について語るのも、よしましょう。この家に—おそらく数百年の長きにわたって—住んできた人々について語るのは、いよいよやめておきます。生者と死者たち、この家に炭を運び、食器を洗い、手紙や新聞を配達した人々のことは語りますまい。私たちにもっと近い人々、つまり知人や友人や家族について語るのは、ますますやめておきます。しかし本来ならば、このような近い関係の人たちのこともふくめて、机からそのうへの鉛筆にいたるまで、その歴史のすべてが記録にもたらされねばならないのです。ここには一橋の建設やパン焼きのときよりも、はるかに多くの—残余や隙間や文学や神やフィクションがあるのではないのでしょうか。

未知の身体

言葉は素材に過ぎないとか、書けば物質化が生じるということは当たっていますし、また容易に言うことです。しかし、そこで一折にふれて確認されることですが—作家と読者の想像力が解明されたことのないあり方で結びつく—これは再構成などできない

い総合的な現象です—生命や人格や運命やストーリーが生まれ、死人のように青ざめた紙の上にも生き生きとした何か生まれ、このうえなく利発で感受性にあふれた解釈でさえも、多少なりとも成功した接近の試みにすぎなくなるということは、どう説明できるのでしょうか。また—書くときであれ読むときであれ—意識から無意識への移行を、そのつど必要とされる完全な正確さで描き出し記録することが、そもそも可能でしょうか。しかも民族や大陸や国際関係や宗教や世界観の多様性にも考慮して、またつねに変動する書き手と読み手の交流関係や、一方が他方となり、その突然の変転において、もはや一方を他方から区別することができないような急激な反転を描き出し記録することが、可能なのでしょうか。どうしても、あまりが残ることになるでしょう。それは不可解と呼んでもいいですし、もしもお望みならば秘密と呼んでもいいでしょう。たとえわずかであれ、私たち西欧の伝統的理性では侵入できない領域が残るでしょうし、残るのです。なぜなら、従来の理性は、これまで解明されることのなかった文学および想像力の理性に遭遇するからです。この文学の理性は身体性に通じており、この身体性というものは西欧の伝統的理性にとって、女性や男性やあるいはまた動物の身体のように把握の域をこえるものなのです。書くということは—少なくとも私にとっては—前へ進むこと、まったく見知らぬ身体を征服すること、まだ知らないあるものから、別のあるものへと進むことです。それがどのような結末に至るのかは、私自身にもわかりません。ここで結末というのは古典的な作劇法の意味ではなく—目の前の事実や考え出された素材、また心的、知的、感覚的な素材を使い—しかも紙の上で！—身体性を手に入れようとする、複雑で総合的な実験の意味においてです。その意味では、成功した音楽や絵画などは絶対にありえません。なぜなら何人も、みずからが追い求めている身体をいまだかつて見たことがないからです。その限りにおいて、表面的な言葉で現代的だとか、あるいはもう少しまともな言葉で生きた芸術などと呼ぶべきものは、すべて実験が発見—つまりは一時のものにすぎないのです。それは歴史的相対性において評価し、測定しうるにすぎませんし、私には永遠の価値を論じたり探したりするのはつまらないことだと思えます。このアイロニー、文学、神、フィクションあるいはレジスタンスなどと名付ける隙間や残余なしに、どうしてやっていけるでしょうか。

言葉、そのイメージの広がり

諸国家も、せいぜいそれが自称しているところに近い程度にすぎません。憲法の文面と現実のあいだに隙間のない国家などは存在しえませんし、その残余の空間で、文学やレジスタンスが成育するし—望むらくは繁栄するのです。いかなる形式の文学も、このような隙間なしにはやっていけません。どれほど正確なルポルタージュも、たとえ書き手がそれを拒否しようとも、情緒や読者の想像力なしにはやっていけません。このうえなく正確なルポルタージュでも—たとえば生活条件を具体的に表現するために、どうしても欠かせな

い事柄の正確で詳細な叙述を省かねばならないことがあります。その点はルポルタージュ自体が伝えるべきことを組み立て、様々な要素を配置しなければなりません。またルポルタージュの解釈やその作業記録も、他人には伝えることができないものです。それは言葉という素材が、だれでも同一に理解できる確定した意味内容だけには単純化できないからです。先に仕事机を例として暗示したように、どんな言葉も歴史やイメージの積み重ね、民族史や社会史および歴史的相対性—それは次世代に伝えられるべきものでしょう—を担っています。さらに意味内容を固定することは、ある言語から別の言語へと翻訳する際に問題となるだけではありません。定義が世界観を決定し、世界観の違いが戦争をもたらしかねない言語の世界では、このことはずっと重大な問題なのです。—ここでは権力政治的にも説明するとはいえ、宗教的定義をめぐる争いでもあった宗教改革後の戦争のことを想起していただければ十分でしょう—。だから—ついでに言う—どんな言葉も地方史やときには地域史によって内容が異なりますから、言葉の積荷を広げて見せない限りは、同じ言葉を使っていることを確かめ合っても無意味なのです。少なくとも私には、残念ながらごくわずかししか理解できないスウェーデン語よりも、日常的に見聞きするドイツ語の方が異質に響くことがあるのです。

金は汚いものか？

政治家、空論家、神学者、哲学者などは、完全な解決やすっかり明らかにされた問題を執拗に押し付けてきます。それが彼らの仕事なのです。しかし、私たち作家の仕事は—作家は、隙間なく完全に説明するものなど何もないことを知っています—隙間に潜り込むことです。あまりにも多くの説明できない、説明のつかない残余が、ごみの全領域が存在します。橋の建設者、パン職人、長編作家などは、たいてい自分の仕事の隙間に通じています。彼らにとって隙間は大した問題ではありません。私たちが純粋文学と政治参加する文学について言い争っている一方で—これはあやまった二者択一の例です、この問題については後でふれることになるでしょう—私たちは純粋な金銭と社会に関わる金銭をめぐる思想のことなどは、あいかわらず意識してもいませんし—あるいは無意識のうちに考えを逸らされています。見た目にはとても合理的なものであるカネについて、政治家や経済学者が語るを初めて見聞きするなら、これまで言及した三種類の職業における神秘的で不可思議でもある領域などは、ますますもって興味を引かないし、おどろくほど無害なものとなるでしょう。ほんの一例として最近過ぎ去った、ひどくふてぶてしいドル攻撃（人々は恥ずかしげにドル危機などと呼んでいましたが）なるものを取り上げましょう。私のような愚かな素人には、だれも名指しでは呼ばないあることが気になりました。それは二つの国がもっとも手ひどく打ちのめされ、—自由という言葉がフィクションに終わるものではないと仮定するなら—買い支えなどというひどく奇妙なことを強いられ、つまりはカネを要求されたのです。この二つの国（旧西ドイツと日本）には歴史的な共通点があ

ります。それは第二次世界大戦に敗北し、どちらも仕事の腕が立ち勤勉だという二つのことで、今も陰口を叩かれていることです。ポケットで小銭を鳴らし、記憶に値するシンボルが印された紙幣を喜んで振って見せているような人に、どうして小銭や紙幣は実際の働きよりも少ないパンやミルクやタクシー利用距離しかもたらさないのかということ、だれかはっきりと教えてくれないでしょうか。カネの神秘には、どれだけの隙間があるのでしょうか。どの金庫にカネの文学が隠されているのでしょうか。理想主義的な親や教育者たちは、つねにカネは汚いものだとかえ込もうとしてきました。私には、それが決して理解できませんでした。なぜなら私は仕事をすれば、いつでも、ただお金を受け取ってきたからです—今回スウェーデンのアカデミーから授与された莫大な賞金ばかりは例外ですが—。どんなに汚い仕事でも、それより他に選択肢を持たない人にとっては、汚いものではありません。その人や家族にとっては、その仕事は生計を意味しています。お金は労働の具現であり、労働は汚いものではありません。労働とそれがもたらすものあいだには、言うまでもなく、つねに説明できない残余があり、それは稼ぎの良し悪しなどといった言い方では、小説や詩の解釈が残す隙間ほどにも埋められないのです。

文学の説明できない残余などは、金銭の神秘の説明できない隙間に比べれば驚くほど無害です。これを説明するために、あいかわらず許しがたい軽率さで自由という言葉をふりまわす人がいますが、そこでは疑問の余地もなく、ある種的神話やその支配要求への服従が求められ、実行されているのです。そこでは政治的分別が訴えられているわけですが、当の問題への洞察や認識は妨げられることになるのです。

西欧的理性

私の小切手の下の欄には、四種類の異なる数字群がすべて合わせて32字並んでいます。そのうちの二群は象形文字のように意味不明です。この32字のうちの5字が意味するところは明らかです。三つは私の口座番号であり、二つは銀行の支店番号です。—それでは、いくつかの0をふくむ残りの27字は何を意味しているのでしょうか。これらの数字には、すべて論理的で意味のある—いかなれば納得できる説明が付くことは確かです。ただ私の脳味噌や意識には、この納得できる説明のための余地がありませんし、そうなると残るのは秘密の教義による数字の神秘だけです。そんなものを見抜くのは、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』や『ヴェッツブルンの祈祷書』¹⁰を見抜くよりも困難ですし、その詩趣や象徴性は私にはずっと不慣れなものでしょう。この32の数字が私に求めることは、すべてのものには正当性があり、すべてがあまりなく明らかで、ほんのわずかな苦勞さえ厭わなければ、それは私にも明瞭になるという事実を信じて疑わないことです。しかしながら、残りの部分は私には神秘であり—あるいはまた不安であり続けるでしょう—それはあらゆる表現形式の文学が流し込みうるものよりも、ずっと大きな不安です。どんな通貨政策の過程も、その通貨の所持者にとって明瞭なものではないのです。

私の電話料金の請求書にも 13 の数字が並んでいます。けっこうな枚数の保険証券のどの一枚にもいくつかの数字が並んでいます。さらにはまた、税金番号や自動車ナンバーや電話番号などもあります。— 私は自分の社会的地位を証明するために、暗唱するか、少なくともメモしておくべきだった、これらの数字を数え上げる労を惜しむつもりはありません。これらの 32 の数字と小切手に記された暗号に、安んじて 6 を乗じましょう。あるいは値引きして 4 を乗じることにはしましょう。さらに生年月日と宗派と戸籍上の立場を示すいくつかの略語を付け加えましょう。— そうすれば、ついに加法と積分法で総和した西洋理性を獲得できるのでしょうか。私たちが理解し受け入れてきた理性は、征服の手段たる植民地主義やキリスト教の伝道を通じて、あるいは両者の混淆によって、全世界に輸出された西洋の傲慢さとどまるものではないでしょう— このことは私たちも教え諭されるだけではなく、明白に理解できるはずで—。当事者にとっては、西洋理性の輸出形態がキリスト教か社会主義か共産主義か資本主義かという違いは、小さなものではないのですが。この理性をめぐる文学が部分的に理解に資することはあるかもしれませんが、文学の理性が勝利を収めてきたとは言えないでしょう。アメリカ大陸に持ち込まれたヨーロッパ理性と対決したとき、インディアンたちが犯した最大の罪とは何だったのでしょうか。それは彼らが金の価値、金銭の価値を知らなかったことです。彼らが戦ったのは、現在、私たちが戦っている理性の最終産物、つまり彼らの世界と環境の破壊、彼らの大地を完全に利潤に屈服させることであり、彼らにとって利潤とは、私たちにとって彼らの神々がそうであるよりも、ずっと縁遠いものでした。日曜日には神に仕え救済者として称えるくせに、月曜日になると金銭と所有と利潤に関する唯一正しい観念が支配する銀行を時間通りに開くということは、ばからしい見せかけの偽善ですが、この偽善からキリスト教の福音の何をアメリカ・インディアンたちは学ぶべきだったというのでしょうか。彼らの生活の具体的表現である水や風の文学、野牛や草地の文学にとって、それは嘲りでしかなかったでしょう。その一方で、私たち西洋の文明人は、全面化した理性の最終産物たる都市において— 公平を期すなら、西洋の文明人は自己自身にも無理なことを強いてきたと言うべきでしょう— どれほど水や風の文学が現実的で、そこに具体化されているものが何であるかに気づき始めています。もしかしたら教会の悲劇は、啓蒙思想の観点から蒙昧と呼ばれたところではなく、受肉した神という非合理的な事柄とは一致し得ない啓蒙的理性の後などを追いかけ、我が物にしようとしたところにあっただのではないのでしょうか。そのような試みは絶望的な失敗に終わるしかなく、事実、失敗に終わったのです。諸規則、条項、専門家の合意、番号を付した諸規則の条項の森、私たちの頭に刷り込まれ、歴史の授業のベルトコンベヤーに刻まれた偏見の産出、そんなものはますます人間同士を疎遠にするだけです。すでに極限に達したヨーロッパの西側では、理性は反理性と呼ぶしかない、まったく別種の理性に直面しています。北アイルランドが抱える怖ろしい問題は、この国では数百年前から二種類の理性が見込みもなく出会い衝突しているということです。

理性支配の徹底

どれだけのごみや蔑視の対象とされた領域を、歴史は後世に残してきたことでしょう。理性の勝利の徴の下には、さまざまな大陸が隠されているのです。そこに住む人々は名目上は同じ言語を話していましたが、実際には疎遠なままでした。たとえば、ヨーロッパ式の結婚が秩序の要素として譲り渡されたところでは、結婚が特権のひとつであるという事実を人々は隠蔽しました。つまり結婚は、作男や下女と呼ばれる農業労働者などには手の届かない、経済的に不可能なものだったのです。言ってしまうえば、彼らには、たった二、三枚のベッドシーツを買う金がなく、かりに金を貯めるか盗んだとしても、今度はベッドシーツをかけるベッドがなかったのです。このように、彼らは平然と野合の状態に放置され、子供だけは生み続けたのです。世界は上に向っても外に向ってもあますことなく、すべて解明されたように見えました。明確な解答、明確な設問、明確な規定。それらは教理問答が与える欺瞞と同じものです。驚くに値することではありません。そして文学もまた、地上を超えた世界を映すばかりで、決して現実世界を映し出すことはなかったのです。さらにまた、軽蔑され隠されてきた領域が反乱の兆しを見せると、それをあやしみ、かつての秩序を切望する人々が現れます。そうなるとう然ながら、ある党派や別の党派が、この反乱から経済的かつ政治的な利益を収めることになるのです。たとえば、性愛と呼ばれる未探求の大陸を、人々は規則で秩序付けようとしてきました。それは切手収集の初心者か最初のアルバムを作るときに、教えてもらう規則のようなものです。許される愛撫や許されない愛撫について、やりきれないほど細かなところまで定められていました。ところが、神学者や空論家たちが同時に驚き気づいたことには、この測定されつくし、冷たくなり、整理されたと思われていた大陸に、まだいくつかの火山が消えずに残っていたのです。一火山というものは、昔からの消火方法では、どうにも消せないものです。そうすると、すべて問題となるものは、神という同情すべき濫用される機関に何でもかんでも押しつけられ、なすりつけられました。社会や経済や性愛の絶望的な悲慘を解決するための、あらゆる道しるべが神を示し、あらゆる地に落ちたものや蔑まれるもの、あらゆる未処理の残余が神に押しつけられました。ところが同時に、神は受肉した存在だと説かれたのです。神が受肉した存在とされるのならば、神と人間は分けられませんから、人間の問題を神に押しつけたり、神の問題を人間に押しつけたりはできないのですが、そんなことは考慮されなかったのです。無神論が処方される一方で、世界とこの社会の悲慘が満足に達することのない独断的な種類の教理問答や、いつまでも、どこまでも先延ばしされる未来—それは現在の陰鬱を証明するものでしかありませんでしたが—へと転嫁されるようなところで長生きしたとしても、だれが疑問を抱くのでしょうか。これに対して耐え難いほどの傲慢さを発揮して、このような事象は反動的であると、この場から告発するくらいしか、私たちにできることはないのでしょうか。しかしながら当局の神の管理人たちが、この地で神が埋もれているごみの山を取り除くこともなく、ソビエト連邦で生きのびたらしい

神を自分たちのものであると返還を要求し、かの地における神という現象を、当地における社会体制の是認のために要求するならば、それも同じ種類の傲慢さでしょう。私たちがキリスト教徒あるいは無神論者として、自己の確信を吹聴するときには、あれやこれやの独善的に信奉される思想体系のために、執拗に利益をあげようとするものです。このような私たちの狂気や高慢そのものが、次の二つのことを繰り返して生きてきました。それは人となったと称される受肉した神と、この神の座に据えられた完全なる人間性という未来像です。たやすく他者を辱める私たちに欠けていること、それは従属や服従やましてや屈服などと取り違えてはならない、謙遜の徳です。このような混同を私たちは植民地化された諸民族に対して行ってきました。彼らの謙遜および謙遜の文学を屈辱へと貶めてきたのです。私たちはつねに屈服や征服を望んできましたが、それも驚くには足りません。外国語の最初の読本が長いことユリウス・カエサルの『ガリア戦記』であり、独善的な態度や疑問の余地のない質問と解答を行う最初の練習が教理問答であるような文明なのですから。教理問答とは、無謬性およびあまりなく完全に解明された諸問題の入門書に他なりません。

教会による表現の弾圧

橋の建設やパン焼きや小説の執筆などのテーマから、いくらか話が逸れてしまいました。が、他の領域における隙間やアイロニーや虚構の部分や残余や神々しさや神秘化やレジスタンスについて、およそのことを話してきました。これらの領域は、私が思うに伝来の理性ではなく—たとえば小説の中など—文学の理性が隠されているような、わずかばかりの未解明な片隅などよりも、ずっと憂慮すべき状況にあり、光が差すことが求められているのです。厳密な順序でグループごとに、暗号めいたものもふくめて、何を意味しているのか正確にわからずとも、私が自分の存在証明のために記憶しておくべき、少なくとも紙片に記しておくべき約 200 の数字がありますが、それらの数字は理性的だと称するだけではなく、実際に理性的でもある官僚機構の内部では、いくつかの抽象的な要求や存在証明以上のことを意味しているわけではないのです。私はそれらの数字を信頼していますし、盲目的にそうするように教えられてきました。それでは私は文学の理性を信頼するだけではなく、その力が強まることを期待してはならないのでしょうか。文学の理性を安息に放置しておくのではなく、その安息から、決して上方への謙遜ではなく、つねに下方への謙遜である文学の理性の持つ謙遜の誇りから、いくらかを受け取ることを期待してはならないのでしょうか。敬意が、他者に対する丁寧さと正義と認め認められたいという欲求が、文学の理性には秘められているのです。

ここで私は、新たな布教の出発点や手段を提供したいわけではありません。しかしながら、文学的謙遜と丁寧と正義の名において言わねばならないと思うのですが、カミュの異邦人と、カフカのセールスマンや銀行員の疎外感と、やはり他者であり続けた受肉した神

のあいだには、多くの共通点やたがいにアプローチしうる可能性が認められます—それも、いくらかの気質の違いを度外視すれば、文学に特徴的な丁寧さと正確な言葉づかいの著しい程度において。いったい、なぜカトリック教会は長きにわたって—どのくらいの長さであったかは正確にはわかりませんが—聖なるものと宣言されたテキストに近づく道を遮断したり、これをラテン語やギリシア語のみにとどめ、聖職者だけが近づきうるものとしたのでしょうか。私の考えでは、教会は文学が表現する言葉に危険を嗅ぎつけ、これを排除しようとしたのであり、文学の理性がもたらす危険から、彼らの権力の理性を守ろうとしたのです。宗教改革がもたらしたもっとも重大な結果は、言葉および言葉を表現することを発見したことでしたが、これは偶然ではありません。これまで、どのような帝国が言葉の帝国なしに、つまり自己の言語を普及させ、被支配者の言語を抑圧することなしに、やってこれたのでしょうか。他ならぬこのような意味連関において私が見出すのは、文学、言葉の具象性、言葉を表現すること、そして想像力—なぜなら言葉と想像力は一体ですから—を告発し、「文学かそれとも情報か」というあやまった二者択一を「分割して統治せよ」(統治術)の新たな現象形態として持ち込もうとする、今回は帝国主義的というよりも、外見だけは反帝国主義的な試みです。反体制的勢力であるインディアンの文学は無害なものに見下して、場合によっては許可してもよいが、解放を求める自国内の諸階級には彼らの文学を許可しないのは、新種の理性の真新しい、これまた世界規模の傲慢さでしょう。文学は特定の階級の特権ではありませんし、そうであったことは一度もありません。体制側にある反動的な市民階級の文学は、彼らが民衆の言葉と呼ぶ、当世流行の言い方をすればジャーゴンやスラングを吸収することで何度も再生してきました。このような事象は安んじて言語的収奪と呼んでもいいでしょう。「情報かそれとも文学か」というあやまった二者択一を説いて回るかぎり、このような収奪を行うことで変えられるものは何もないでしょうが。民衆の言語やスラングやジャーゴンなどの表現には、郷愁の入り混じったごみのような否定性があるかもしれませんが、それが文学にも、ごみの山に行くよう命じることを正当化するわけではありませんし、どのような形式や表現様式の芸術に対しても、そのような権限はありません。表現の可能性について唯一の正しさや完全なまちがいなどを決めつけることで、新たな教理問答を練り上げて一定の表現方法だけを正当化し、他者に表現と具象性を保留しておくというのは坊主臭いやり方です。伝えられる内容が力を持つかどうかは、それが見出す表現の力にかかっています。ここには神学的にはひどく退屈な、しかし拒否された受肉の例としては重要な、パンと葡萄酒の聖体拝領をめぐる争いを思い起こさせるものが萌えています。その後、議論は世界のカトリック部分に関しては、およそパンなどとは呼べない青白い祭餅に切りつめられてしまったのですが、不当にも与えられなかった数億リットルの葡萄酒のことは語らずにおきましょう。この本質は素材の問題だけではなく、それ以上に、この素材が具象化するはずだったものを、傲慢に誤認した点にあったのです。

文学の解放力と国際性

さしあたり何かを与えずにおくことで、ある階級を解放することはできません。このマニエール派ⁱⁱⁱの新派が、かりに非宗教的とか反宗教的などと自称したとしても、この一派はヤン・フスの焚刑やルターの破門に終わりがねない教会支配のモデルを引き継ぐことになるのです。私たちは安んじて美の概念について論争してもいいでしょうし、新しい美学を発展させてもいいでしょう。そもそも美学などは時代遅れかもしれませんが、ともあれ美学は表現や認識の制限を前提としてはなりません。さらに美学が決して排除してはならないことがあります。それは文学がもたらす想像力です。文学は想像力の翼で人々を南北アメリカへと運び、スウェーデンへ、インドへ、アフリカへと運びます。文学は想像力の翼で運ぶのです。別の階級へ、別の時代へ、別の宗教へ、別の人種へと。—市民的な形式の文学においても一疎外を生み出すことが文学の目的だったことは一度もありません。疎外されたものを文学の対象として拾い上げ、そうすることで疎外を克服することが、その目的だったのです。これまで多数の文学を生み出してきた階級が、すでに時代遅れと見なされるとしても、多くの場合に、この階級の産物である文学は、その階級に対するレジスタンスの隠れ家でもあったのです。このようなレジスタンスの国際性が維持されねばなりませんし、それが一方では—アレクサンドル・ソルジェニーツィン^{iv}のような人の信仰心を守り育て、他方では—フェルナンド・アラバル^vのような人を激しく苛烈な宗教および教会の敵対者としているのです。このレジスタンスは一方では信仰者を他方では無神論者を生み出すような、歴史状況に応じた単純な機械的反射作用と見なされてはなりません。それは多様なごみの山や蔑視された領域の中から生み出される、精神的諸連関の具体化に他なりません。それはまた傲慢さや無謬性を主張することなく、おたがいに関連していることを認め合うことでもあります。たとえばソビエト連邦の政治犯の囚人や孤立した反対者にとっては、西側でベトナム戦争に抗議することなどは、不自然か常軌を逸したことだと思えるでしょう。—それは独居房や社会的孤立にある人の心理としては理解できることかもしれません。—しかしながら、罪というものは個別のものであり、ある人の罪と別の人の罪を混同することはできないとしても、ベトナムの問題でデモ行進が行われるとしたら、それはソビエトで独居房にいる彼自身のために行われるデモ行進でもあるということ、その人も認めねばならないでしょう。これが理想主義的に聞こえる言い方だということは、わかっています。しかし私には、これだけが唯一可能な新しい国際性だと思えるのです。それは、たんなる中立性などとは異なるものです。作家は、虚偽や口実にすぎない分裂や判断を受け入れることはできませんし、もしも私たちが政治参加する文学とその他の文学への分裂などを議論するとしたら、それは私には、ほとんど自殺行為にも等しいことだと思われま。ここにあるのは、ひとつのことを信じるためには別のことまでも極端に支持してしまうという問題だけではないのです。そうではなく私たちはこの偽りの二者択一によって、私たちを不和にする市民社会の分裂の原理を引きついしてしまうのです。それは私た

ちの潜在的な力の分裂を意味するだけではなく一恥じらいもなく、あえて口にするのが一表現される可能性を秘めた美の分裂でもあるのです。なぜなら思想の伝達と同様に、美の表現には解放する力があるからであり、そのような美は美であることによって、それが表現する挑発によって、解放する力を持つからです。分断されていない文学の力とは、様々な方向性を中立化することではなく、レジスタンスを国際化することです。このレジスタンスに、文学、表現、具象性、想像力および美の本質が存するのです。私たちから文学のみならず芸術全体を奪おうとする新しいマニ教の聖画像破壊運動は、私たちから芸術を略奪するだけではなく、この運動が守るべきと信じている人々からも芸術を略奪することになるでしょう。呪いの言葉、辛辣な皮肉、ある階級の絶望的状况に関する情報さえも、文学なしには不可能です。たとえ文学を弾劾するときでも、まずは文学を手がかりとしなければなりません。ローザ・ルクセンブルクの本をよく読んで、レーニンが、まず、どのような記念碑を建てるように指示したのか確かめてください。最初の記念碑はトルストイ伯爵のためでした。トルストイについて、レーニンは「この伯爵が書くことで初めてロシア文学に農民が生まれた」と述べています。そして二つ目の記念碑は「反動的保守」であるドストエフスキーのためでした。もしも自分自身のためならば一禁欲的な変革の道を選ぶのならば一文学や芸術は放棄してもいいでしょう。しかし他人のためには、まず何を放棄すべきなのかを教え知らせるのしなければ、そうすることはできません。文学や芸術を放棄することは、自由意志によらなければなりません。そうでなければ、それは新しい教理問答のような坊主臭い規定となり、またもや全大陸が愛の大陸のように不毛の地へと定められてしまうことでしょう。ただの遊戯ではなく、またショックを与えるためだけでなく、芸術と文学は幾度も自己の形式を変え、実験において新たな形式を発見してきました。その諸形式によって芸術と文学は何かを体現してきたのであり、たんに目の前にあるものを是認するようなことは、ほとんどなかったのです。芸術と文学を消し去るならば、それははるかに大きな可能性を、ある策略を放棄することを意味するでしょう。あいかわらず芸術は良き隠れ家ですが、それはダイナマイトのためではなく、精神的爆薬と社会的時限爆弾のための隠れ家なのです。そうでなければ、どうしてこれまで様々な禁書目録が存在してきたのでしょうか。まさに軽蔑され、ときには実際に軽蔑に値する芸術の美しさや不可解さにおいてこそ、芸術は突然の衝撃や突然の認識をもたらす逆鉤にとって、最良の隠れ場となるのです。

結び

この講演を終えるにあたって、どうしてもお断りしておかねばならないことがあります。ここで、ほのめかしたり詳細に述べてきたことには、避けがたい欠点がありました。それは私自身が一望むらくは不完全に一養われてきた西洋理性の伝統に対して、まさに理性を手段として疑念を呈してきたことです。この西洋理性を、その全領域にわたって非難するとしたら、それはとても不当なことでしょう。理性の全面化要求や、ここで理性の傲慢と名付けたものへの疑念をもたらし、また文学の理性と名付けたものをめぐる経験や記憶を保持することに成功したのも、まぎれもなく理性だったのですから。もっとも私は文学の理性の特権的機関や市民階級の機関とは見なしていないのですが。文学の理性は、他人にも伝えうるものです。さらには、その正確な言葉使いや表現によって、ときには奇異の念を抱かせるものであるがゆえに、文学の理性は疎外や排除を阻止し、乗り越えるのです。奇異の念を抱かせるということは、びっくりさせること、驚かせること、あるいは感動させることでもあります。また私が謙遜の徳について—もちろん、ほんのそれとなくですが—一語ったことは、自分が受けた宗教教育やその記憶に負っているのではなく—宗教が謙遜について語るときは、いつでも屈辱を意味しています—、若いときや年を取ってからドストエフスキーを読んだことに負っています。階級なき文学や、もはや階級によって制限されない文学を目指す世界的な運動、辱められた人々や人間でありながらもごみであると宣告された人々の全領域を発見すること、こうしたことが文学にとって最も重要な転換点をなすと私は見なしています。それゆえに私は文学に対する破壊に警告し、マニ教がもたらす不毛に警告し、子供を流し去るまでは反対に風呂の水さえも流そうとはしない—私の考えでは—盲目的な熱狂による聖画像破壊運動に警告するのです。若さや老いをそれだけで一方的に非難したり賛美したりすることは無意味でしょう。もはや博物館に保存されるしかない旧秩序を夢見ること無意味でしょう。保守か革新かという二者択一を並べるとは無意味でしょう。家具や衣類や様々な言い回しや情緒にしがみつくと、新しい郷愁の波が示しているのは、この新しい世界が、私たちにとってますます疎遠になりつつあるということだけです。私たちが頼みとしてきた西洋理性は、世界をより親しみあるものとはしませんでしたし、「合理的か非合理的か」という二者択一も、またあやまりでした。多くの事柄はふれずにおきましたし、見過ごしたものもあるに違いありません。それはひとつの考えを話し始めると、必ず別の考えへと発展しますし、こうしたテーマの大陸はどのひとつも完全に測定しようとするれば、ずっと先まで行くことになるからです。フモールのこともお話しすることができませんでした。フモールもまた特定階級の特権ではないのですが、フモールの文学は故意に看過されており、レジスタンスの隠れ家として働いているのです。

訳注

- i) アメリカではベトナム戦争の長期化がもたらす軍事費の増大によって、インフレが進行した。そのため 1969 年頃から経常黒字国であった日本やドイツはドルの買い支えを行い、それによって両国においても景気が過熱していた。
- ii) 9 世紀初頭の叙事詩。ヴェッソブルン修道院の写本の中に記されていたもので、古高ドイツ語最古の文献のひとつとされる。
- iii) サーサーン朝ペルシャのマニ(210-275?)を開祖とする宗教。善悪二元論を特徴とし、布教においては各地の宗教との混淆を積極的に進めた。おそらくベルは、様々な形態で支配の手を伸ばし有用性の観点から世界を分断してきた西洋理性のあり方を、マニ教の混淆主義や善悪二元論に重ね合わせているのだろう。
- iv) アレクサンドル・ソルジェニーツィン(1918-2008)。ロシアの作家。信仰心の篤いロシア正教徒であり、その信念から旧ソ連体制への批判者であり続けた。代表作『収容所群島』『イワン・デニーソヴィチの一日』など。彼が 1974 年に国外に追放されたとき、国際ペンクラブの会長だったベルは援助の手を差し伸べ、自宅に招待している。
- v) フェルナンド・アラバル(1932-)。スペインの劇作家。ベケットやイヨネスコと並ぶ不条理劇の代表者で、強烈な社会批判や教会批判で知られる。代表作『戦場のピクニック』『アッシリア皇帝と建築家』など。